

Top

トップと語る

76

interview

株式会社打江精機



株式会社打江精機 代表取締役社長

打江 信夫氏

◎聞き手

十六総合研究所 取締役社長 佐竹 達比古
(対談日／2025年5月26日)

UTSUE Nobuo

UTSUE SEIKI CO.,LTD.

社員、お客さま、そして地域、これら全ての関係者の方々に、「打江精機で働いてよかった」「打江精機と取引してよかった」「打江精機が高山にあってよかった」と心から思っていたいただけるような会社にしていきたいと考えています。

株式会社打江精機は、岐阜県高山市に本社を持つ精密機械メーカーで、来年創業75周年を迎えます。長年培ってきた高度な精密機械技術などの独自のノウハウと最新鋭の設備を強みに、建設機械・産業機械の心臓部である高精度な油圧バルブ、ポンプ、モーター部品を国内外のメーカーに供給しています。また、長年にわたり障がい者雇用を積極的に行うなど、社会貢献活動にも力を入れています。

今回は株式会社打江精機 本社をお訪ねし、代表取締役社長 打江 信夫氏からお話を伺いました。

小さくても付加価値の高い ものづくりに特化



十六総合研究所
取締役社長 佐竹 達比古

——会社の設立からこれまでの沿革について
お話し願います。

●打江社長（以下、敬称略） 私の父が1951年に打江鉄工所を創業したことが始まりです。創業当初は、工作機械メーカーの部品加工や木工機械の修

理など、地元の仕事を一人で行っていました。その後、名古屋の工具商社の紹介で、モーター関係の部品や8ミリカメラの部品加工なども手がけるようになりました。

油圧部品の製造を開始したきっかけは、現在も取引のある大手油圧機器メーカーさんとの出会いでした。当時、高山は交通の便が悪かったため、なるべく送料がかからないように、小さくても付加価値の高いものを作るという方針で、建設機械や農業機械、自動車の油圧部品を製造していました。



高山市中心部近くの桐生工場の様子(1970年当時)

——次第に業容を拡大していかれたのですね。

●打江 最初は工場を借りていましたが、1960年に土地を購入し、1階が工場、2階が私たち家族の住まいという形で工場を作りました。そこは市内の中心部に近く、工場の拡張が難しくなったため、1972年に高山市山田町へ工場を移転しました。当時の投資額は年商に近く、相当思い切った投資だったと聞いています。

また、業容を拡大できた要因の一つには、測定設備へ積極的に投資を行ったこともあります。当時の中小企業では珍しかった三次元測定機や真円度測定機などを導入しました。これにより、地方にありながら加工だけではなく高度な測定ができる会社として、新規のお客さまからも仕事の引き合いが増え、会社が大きくなる転機となりました。

——先見の明がおりになったのですね。先代について印象的な事柄はありますか。

●打江 父が常々言っていたのは、「1回や2回の失敗ではくじけずに、とにかく難しい仕事で



山田工場を移転・統合した、匠ヶ丘第3工場（現在）

も断らずにちゃんと物にする」ということです。当社の行動指針にも「失敗を恐れず難しい仕事にチャレンジする」とありますが、まさにその繰り返しでした。

印象に残っているのはIT不況と言われた2001年頃のことです。技術的に非常に難しい仕事の引き合いがありました。お客さまも初めての挑戦で、当社の技術者とお客さまの担当者の方々とともに、一週間かけて寝る間も惜しんで取り組み、何とか作り上げることができました。当時は当社もIT不況の影響を受けていましたが、これが転機となり、2008年頃には売上が3倍に伸びました。

—— 社長に就任されてからはどのような状況でしたか。

●打江 私が社長になったのが2003年なのですが、最初の大きな試練がリーマンショックでした。2008年9月頃までは売上が伸びていましたが、そこから急落し、2009年2月には単月で8割の仕事がなくなりました。週休3日や4日を導入し、夜勤も停止しました。

2009年の秋口からは、中国がリーマンショック対策として実施した大規模な経済対策により建設機械の設備投資が促されたことで、売上が急激に回復しました。

当社の製品が組み込まれる建設機械は世界



株式会社打江精機
代表取締役社長 打江 信夫氏

中で広く使われるため、世界の景気変動から大きな影響を受けます。最近で特に顕著だったのは2020年のコロナ禍で、世界経済が大きな打撃を受け、当社も2020年上半期の業績は大きく落ち込みました。しかし、海外の建設需要が復活したことで、下半期から一気に回復しました。

総合力を強みに高い品質を維持

—— 御社の強みや、ものづくりにおいて重視している点についてお聞かせください。

●打江 ものづくりにおいては品質、コスト、納期（QCD）が重要ですが、中でも品質が最も重要で、油圧部品は1000分の1ミリ単位の寸法精度が求められます。寸法だけではなく、真円度や円筒度といった幾何公差[※]も非常に高い精度が必要です。また、清浄度も重要です。油圧部品は隙間が狭く、わずかなゴミが故障に直結

（※）部品の形や位置、向きなどについて、許容できるズレの範囲を数値で設定した設計ルール



対談風景

株式会社打江精機

代表取締役社長

打江 信夫氏(右)、

十六総合研究所 取締役社長

佐竹 達比古(左)

しますので、製品そのものの汚れだけでなく、洗淨液やテスト油の清浄度合まで管理しています。こうした総合力での品質の作り込みが当社の強みです。

人、地域との繋がりを大切に

—— この飛騨高山の地で事業を継続していくことについて、どのようなお考えをお持ちですか。

●打江 伝統文化や豊かな自然に恵まれたこの地でものづくりができるのは、本当に幸せなことだと感じています。過去には市外の工場団地への進出の話もありましたが、高山で事業を継続することに意義があると考え、この地で業容を拡大してきました。

お客さまの多くは遠方ですので、当社へお越しいただくには時間がかかるのですが、高山自体の魅力も手伝って「行ってみたい」と言っているだけでもあり、ありがたいことです。

—— 地元で生まれ育った子供たちが、進学などで外に出て、また戻ってきて働く場所があるという

のは、大きな地域貢献だと感じます。その他の社会貢献活動にも積極的に取り組んでいらっしゃるそうですね。小学生の工場見学も多いと伺いました。

●打江 小学校5年生は日本の工業を学ぶカリキュラムがあるので、その一環で当社へ見学に来てくれる学校がいくつかあります。子供たちは目をキラキラさせていて、私たちが会社概要を説明すると、こちらが嬉しくなるくらい熱心に聞いてくれます。班に分かれて工場見学をもらい、最後に当社製品が使われているホイールローダーを実際に動かして見せると、大歓声が上がります。私たちの励みにもなるので、喜んで引き受けています。

—— 障がい者雇用にも力を入れていらっしゃるそうですね。

●打江 50年以上前から継続しています。父が高山の障がい者施設を見学した際に、一人ひとりの個性を活かす活動の様子に感銘を受けて採用を決めたのが始まりです。その頃はまだ、障がいのある人が地域で共に暮らし、働くことが珍しい時代でしたので、社内からは心配の声



会社全景



小学生の工場見学 ホイールローダー実演の様子

も上がったそうですが、父の意志は固かったです。当時は自宅の1階が工場でしたから、仕事が終わると、私たち家族と一緒に食事をしたり、銭湯へ行ったりと家族同然の付き合いをして、生活全般の支援をしていました。その方は50年以上勤められ、昨年70歳で退職するまでの間に、厚生労働大臣表彰を受けて天皇陛下に拝謁するなど、私たちの励みにもなりました。

現在は、当社の取締役で、県の障がい者雇用アドバイザーも務めている私の妻が推進してくれています。障がいのある人に必要な配慮や支援はするけれど、特別な人とは思わない、そう考える文化が先代から受け継がれています。会社の規模が大きくなった今、そういった意識を社員一人ひとりに伝えていくことが重要だと考えています。

人間性の豊かな「人財」を育てる

—— 人材育成において大切にされていることはありますか。

●打江 特別なカリキュラムがあるわけではありませんが、「健康で礼儀を重んじた人間性豊かな人財を育てる」という行動指針の下、人材をどう育てていくかを非常に大切にしています。新入社員教育では、まず会社の理念や創業

者の思いを伝え、その後は技術的な研修を行います。1年間はサポートする社員をつけてフォローしています。

ものづくりにおいては、座学だけでは分からない部分があるため、「安全道場」「品質道場」という研修の場を設けています。

「安全道場」では工場内作業を安全に行うための研修を行います。過去の怪我の事例や危険予知について、正社員だけでなく派遣社員や外国人の方も含めて、入社したら必ず安全教育を受けてもらいます。

「品質道場」では製品の種類や品質を学ぶための研修を行います。最初に、当社の製品が完成品である油圧ショベルなどでどう使われ、どういう働きをするのかを学びます。誤動作すると人命に関わることもあるため、やりがいとともに責任も感じてもらいます。また、材料や熱処理、測定なども実際に現物を使って学びます。特定の先生がいるわけではなく、各職場の主任が先生となって教えています。

製品が最終的にどう役に立っているかを学ぶことで、自分の仕事の意義が分かり、大きなモチベーションになっています。過去には、お客さまの油圧ショベルが工場に来た際に、それを見て涙ながらに感激する社員もいました。



第3工場



ロボットによる部品加工

—— 技術のレベルを保っていくためにどのようなことをされていますか。

●打江 技術に関しては、基本は現場でのOJTです。ただ、昔のように「見て覚えろ」というわけにはいきませんので、カリキュラムを組んだ技術研修を行っています。技能向上委員会が中心となって、加工技術、組立技術、検査測定技術の向上に努めています。また、国の技能検定も積極的に受検を推奨しており、合格者には手当を支給するなど、モチベーション向上にも繋がっています。ITや機械の進歩は著しいので、お客さまからも色々と教えていただきながら、最先端の技術を身につけるようにしています。

コミュニケーションを大切に風通しの良い職場をつくる

—— 従業員の方とのコミュニケーションも盛んに行われているそうですね。

●打江 日々のコミュニケーションは非常に大切にしています。組織内でのコミュニケーションとして、課長が現場を巡回して従業員の声をメモし、経営層でチェックして対処する「課長の聞き取り巡回」を行っています。また、「3F提案制度」というものがあります。「負担」「不安」「不満」の3つのFについて、記名で提案を提出してもらい、上司が解決できることは上司が対応し、経営層で対応が必要なことは月に一度の部門長会議で検討し、フィードバックして

います。

上司に付度してしまったり、言いにくい雰囲気があったりすると、かえって経営リスクになります。だからこそ、日頃から風通しの良さを考えています。私も時間があるときは現場巡回をするようにしています。

創業75周年を見据えて

—— 来年は創業75周年を迎えられますが、今後の経営や事業を進めていくなかで、実現したいことや展望をお聞かせください。

●打江 現在、一部では油圧制御から電氣化、電子化への移行がみられます。また、カーボンニュートラルの流れの中で建設機械そのものが電動化していく可能性もあります。現在の製品の需要がずっと続くわけではありませんので、新しい変化に対応できるよう、技術力を高めていく必要があると考えています。

また、現在の技術を他に生かせるところはないか、まだ具体的な案があるわけではありませんが、今後様々な調査・研究を進めながら視野を広げていく必要があると思っています。

我々のものづくりは、DXなどもありますが、基本的には地道な品質、コスト、納期の改善を続けていく必要があると考えています。今後は労働力不足や法規制の問題、BCP、環境問題など様々な問題がありますので、そういったことにも積極的に取り組みながら事業を運営してい



油圧バルブ組立・テスト



品質道場 研修



油圧ショベル見学

く必要がありますね。

当社が今日あるのも、様々な方々とのつながりのおかげですので、「出会いを大切に」ということを常に心がけています。これは仕事だけでなく、地域の活動でもそうです。私自身も高山鐵工組合長や色々な協議会の役員、高等学校の後援会長などを務めています。去年は地域の町内会長も務めました。こうした活動を通じて、色々な方との関係が広がり、新たな出会いが生まれています。これからも仕事、地域、プライベート問わず、出会いを大切にしていきたいです。社員、お客さま、そして地域、これらすべての関係者の方々に、「打江精機で働いてよかった」「打江精機と取引してよかった」「打江精機が高山にあってよかった」と心から思っているような会社にしていきたいと考えています。



本社にて

—— 後継者育成については、どのようにお考えですか。

●打江 今年4月に、大手建設機械メーカーさんで5年間お世話になった長男が当社に入社しました。これからも様々なことを学び、考え、経験を積んでほしいと思います。

真剣に取り組めば、
何歳になっても進化できる

—— マラソンに挑戦していらっしゃるとうかがいました。

●打江 特定健診（メタボ健診）を受けて生活習慣の改善を指導されたことをきっかけに、50歳からマラソンを始めました。71km、100kmといったコースのある、飛騨高山ウルトラマラソンにも毎回出場しています。

身体の衰えはあるものの、何歳になっても真剣に取り組めば進化できるものだ実感しています。これからも努力を惜しまずに、日々進化し続けていきたいと思っています。

—— 本日は貴重なお話をありがとうございました。

（対談日：2025年5月26日）

会社概要

- 本社 岐阜県高山市匠ヶ丘町239-1
- 創業 1951年(昭和26年)2月
- 設立 1960年(昭和35年)6月
- 従業員数 456名(2025年6月時点)
- 事業内容 各種油圧機器製造